



映画雑感 8

柴生田 晴四

(経済倶楽部理事長)

▼昨年後半の邦画から。まず「ちよつと今から仕事やめてくる」。過労死の問題が一部のブラック企業でなく、日本を代表する大企業にまで及んでいたことが明らかになりました。映画では、仕事のしわ寄せを押し付けられ追い込まれていく若者の姿がリアルで痛ましく描かれます。この映画のように「やめていいんだよ」と誰かが教えてあげていたら悲劇は防げたのにとつくづく思います。

▼「夜空はいつでも最高密度の青色だ」は「舟を編む」で高い評価を得た石井裕也監督が最もタビの同名詩集にインスピレーションを得て映画化した意欲作。看護師をしながら夜はガールズバーで働く女性と、工事現場で日雇い仕事をしている青年が、偶然出会い、反発し合いながらも、やがて惹かれ合っていく。大都会の片隅で得体の知れない不安や死と向き合ってもがきながら生きている若者たちの心情を、観客の神経を逆なでするような表現が浮かび上がります。

▼俳優の向井理が自らの祖母の残した手記の映画化を企画した「いつかまた君と」は、戦中戦後の混乱の中で生きた夫婦の苦難の道りと50年に及ぶ深い絆を淡々と描いた作品。

作意や技巧を超越した真実が心に沁みます。

▼今年もたくさんの恋愛映画や青春映画を観ました。「君の臍臓が食べたい」は、恋人の突然の死によって最後の別れまでもが断ち切られてしまった青年が、過去から浮かび上がってきた恋人のメッセージによって再生していく謎解き物語にもなっており、興行きと余韻が楽しめる作品でした。

▼バツイチ再婚夫婦が二人の間の子供を授かることになり、その誕生までの葛藤を描いた「幼子われらに生まれ」。ささやかな家族の幸福が妊娠によって揺れ動き始めます。突然義理の娘とうまくいかなくなった父親のやるせなさを演ずる浅野忠信が秀逸です。

▼「三度目の殺人」は、何を考えているかわか

らない殺人犯と、彼を何とか死刑から免れさせようとする担当弁護士との虚々実々のやり取りが展開されます。得体のしれなさで観客を引き込んでいく役所広司がさすがの貫禄。

▼黒沢清監督の「散歩する侵略者」。侵略SF映画ですが、夫婦の愛と死を巡る普遍的テーマと、事件記者と侵略者が乗り移った少年との奇妙な友情と派手なアクションが重層的に進行。映画の醍醐味を存分に味わえます。

▼芥川賞受賞作でベストラーの「火花」が早くも映画化。お笑いの世界に青春のすべてを賭け、悪戦苦闘する若き芸人たちの10年間で、桐谷健太と菅田将暉という人気と実力を兼ね備えた二人が見事に造形、時代の空気と生きた人間の確かな存在感を刻印しました。